



理事会だより (9・8)

冒頭に元総務部長・理事として協会に多大の貢献をされた故中野文子さんへ黙祷。

一、秋季俳句大会について、①コロナウイルス感染の状況を踏まえ万全を期して二部中止と決定した旨を会長より報告され承認。②会員宛中止チラシを会報九月号に差込み、外部投句者へは作品集と同時にお知らせする③選句結果を受け作品集を作成し月内に発送予定。

二、梅まつり俳句大会(令和5年2月5日)の兼題(梅日脚伸ぶ)、締切、賞、選者特選賞(佃名誉会長、新井顧問、池田会長、春野・みなみ・山北)等を決定(詳細は本号12頁)

三、秋の吟行会は10月理事会で具体的に連絡、参加見込み人数を10月理事会にて聴取。

四、(その他)・大会横断幕ご提供の陌間理事への御礼につき会長へ一任。・会費は全入。

「俳句おだわら」10句抄 (661号より)

瀬戸正洋 抄出

梅雨寒や捨てた言葉をまた拾う

六月や見かけぬものに蛇の目傘

晩年は急がず迷わずかたつむり

ほうたるやコンパスで描く花模様

川音を呑み込んでゐる青薄

ほう螢きみは彼の世のわれなのか

青桐も剥き身直前の夕べかな

ひよいと出会いひよいと別れる草の世は

ところてんは海だ海だと突いている

チョコアイス食べたきも我は管だらけ

竹下由里子 抄出

青嵐砂蹴り上げて走る子等

江ノ電や今あぢさゐは海のいろ

炎昼やガパオライスの目玉焼

波音の聞ゆる寺や百日紅

川音を呑み込んでゐる青薄

大夕焼異郷に就きし父のこと

子の来れば灯のみづみづし胡瓜揉

ひよいと出会いひよいと別れる草の世は

野良猫のいつも逃げ腰花みかん

なんといふ夏われ生きて還りくる

加藤かほる

池田 忠山

尾崎 竹詩

竹下由里子

村場 十五

伊藤 道郎

佃 悦夫

大石 和子

大石 雄介

柴田 礼子

若村 京子

肥後ちさこ

池田 令子

鳥海 壮六

村場 十五

中村 裕子

島 梅乃

大石 和子

山田 照子

柴田 礼子

令和四年度小田原秋季俳句大会

今年度初めて企画した大会であったが、新型コロナウイルスで第二部の俳句大会は中止となり、兼題「新涼」「木槿」の募集のみとなった。投句は百五十七名二百四十七組。

小田原市長賞

底紅や齡十九の兵の墓

清水 吞舟

小田原市議会議長賞

新涼や糊のききたるシエフの帽

奥村 忍こ

小田原俳句協会会長賞

新涼の風に一と日の野良着脱ぐ

長島 久江

小田原俳句協会賞

席ゆづる少女の笑顔涼新

清水 吞舟

新涼や百疊といふ青畳

山田 凍崖

新涼や墨濃く匂ふ命名書

清水 吞舟

一頭も帰らぬ軍馬夕木槿

加藤 三眠

風抜くる田の字の家や花木槿

小林 環

やわらかに生きて八十路や白木槿

豊田 幸枝

新涼や写経の墨の匂ひ立ち

大澤 秀子

底紅や匂ひ袋に銀のすず

寶珠山京子

町医者は今も変はらぬ木槿垣

長島 久江

選者特選賞 評

木槿咲いて立つてるほく坐つてる

大石 雄介

只事を述べている訳ではない。木槿はあるいは持ちやすくむことしか出来ず、最も輝くその季節に付ける花は嘆いているのか誇示しているのか、木槿に訊いてみる他は無い。

佇つ木槿、坐る人物この立体感ともに命を輝くものにしてしているとしか言いようが無い。(佃 悦夫)

木槿咲くテレビ体操聞きながら

鈴木 緑

作者がテレビ体操を聞いているのが前提になるが、文脈は、朝テレビ体操を聞きながら木槿の咲くことよ、というのである。この木槿と己の分かれたれない混沌とした感興を書いているのだとしたら大賛成である。(大石 雄介)

新涼や巫女の袴の水浅葱

西賀 久實

映像のない季語（新涼）を中七下五で具現化。巫女の袴の水浅葱が色彩鮮やか。一句にア音を6つ散らす調べに、夏の涼しさと異なる本格的な涼しさが横溢。（公財）俳人協会の募集要項に「（原則として）有季定型に限る」とあるが、この句の定型に深く安堵する。

(池田 忠山)

出征を送りし駅や白木槿

大島美恵子

豆腐屋の変はらぬ玻璃戸涼新た

山崎美知子

新涼やざくざく進む裁ち鎌

竹下由里子

禅寺の長き回廊涼新た

日高 朝代

紅木槿母は童女に還りけり

瀬戸 りん

身になじむ木綿の農良着秋涼し

久保寺トミ子

新涼や東嶺は雲を解き放ち

大澤 秀子

新涼や脳の瘡蓋が取れた

瀬戸 正洋

選者特選賞

(小田原俳句協会名誉会長) 佃 悦夫特選

木槿咲いて立ってるほく坐ってる

大石 雄介

(小田原俳句協会顧問)

大石雄介特選

木槿咲くテレビ体操聞きながら

鈴木 緑

(小田原俳句協会会長)

池田忠山特選

新涼や巫女の袴の水浅葱

西賀 久實

(小田原俳句会副会長)

山田照子特選

底紅や母の手書の和讃帖

木村 幸枝

(たけのこ会代表)

宮崎悦女特選

底紅や齡十九の兵の墓

清水 吞舟

(沈丁俳句会代表)

寶子山京子特選

新涼や脳の瘡蓋が取れた

瀬戸 正洋

底紅や母の手書きの和讃帖

木村 幸枝

コロナ中で母の部屋を整理し始めました。晩年始めた御詠歌を、仲間に遅れて入った母、人知れず練習する姿を。手書きの帳面やテープの声、大会での晴れやかな写真など。

私も作者同様底紅に母を重ね合せ懐かしく想い出しております。
(山田 照子)

底紅や齡十九の兵の墓

清水 吞舟

私の夫は生まれる前に父を戦死で、五才時に母をも満州で亡くし祖父母を親として育った。掲句は成人を前に戦死した若者の無念の墓を詠んだ。夫の人生と重ねあわせ、底紅と齡十九に戦争の悲惨さを思い、胸が痛みました。
(宮崎 悦女)

新涼や脳の瘡蓋が取れた

瀬戸 正洋

夏の間もやもやしていた脳も、新涼とともにいつもの冴えが戻って来た。と感じたとたん、脳の瘡蓋が取れた、と捌く作者。情緒に流されない直感即句、俳句魂に感服。こういう感度で俳句を書いたら、さぞかし嬉しいだろうなあ、つくづく思う。

(寶子山京子)

外国人墓碑 岡本史郎

霧わたる芦ノ湖畔にドイツ兵墓
 招魂碑白露そつと玉結ぶ
 終戦日加害と被害双つの手
 文化の日老耄歳時記探しおり
 秋思う着想弱し回想強し
 失語五秒地名も人も零余子かな
 ボルシチや前線墓地にシェフもいて
 天上の満月地の朦朧を射す
 葛の花内山抑留所の外国人墓碑
 鳳仙花戦傷兵妻とき子の句

夏休み 岡田典代

夏帽子足をくすぐる沢の水
 任命す金魚の世話と風呂掃除
 夏休み洗たく干してまた干して
 二度寝して眠さ倍増夏休み
 胃腸薬あればよかったかき氷
 水中花只今自宅療養中
 大きめの上ばきを買う日焼けの子
 晩夏光帰路は静かに救急車
 コロナ禍や遊びきれずに居て晩夏
 夏休み一行日記を残すのみ

俳句おだわら（9・19メ切り、到着順）

◆香雨・梅ごち（8・28）

忠山報

水音も風も秋めく橋の上

肥後ちさこ

受話器より里のお山の蝉しぐれ

関戸わよこ

秋草の壺にあふれて山の宿

青山 典子

朝採れの高原野菜露しとど

門松 鳳文

手つかずの押入れ整理秋暑し

吉田 百代

初秋の嶋立沢に旅の僧

吉田 康雄

入相に忽と消えたる赤とんぼ

陌間みどり

やさしさをときどき忘れ草の花

小澤 純子

秋めくや生絹すずしとまがふ雲のすぢ

池田 忠山

◆こよろぎ（9・8）

つとむ報

秋寒やふわりとてふのふわり舞ふ

板谷 雅泉

峠路に風の集まる猫じゃらし

植松テル子

かりがねや目つむりて聞く母の声

神山つとむ

◆小田原鹿火屋（8・26）

久江報

風音か蹄の音か盆提灯

足立 和子

蒼天の陽のゆきわたる百日紅

川本 育子

青磁の壺向き置き替へり半夏生

高橋 小糸

木犀の香の中神鈴揺らしをり

山崎 悦子

コロナパンデミック 神山つとむ

短夜やコロナニユースの第七波
 夏野菜コロナウイルスあれやこれ
 洗濯物コロナを清めたたむ夏
 一斉にコロナ盛れる炎暑中
 蟬時雨波の拡がるコロナかな
 終りなきコロナと蟻を見つめをり
 秋天の地球を覆ふコロナ病
 秋風のふつと連れ去るコロナなれ
 行く末のコロナ禍を見む浮寝鳥
 風さらふ冬蝶のごとコロナ去れ

羊の夢 齊藤 桂

軍港は常の静けさ芙蓉咲く
 敗戦日グミぐにゆぐにゆと噛みてをり
 かなかなの森深うして神近き
 鈴懸の青き実揺れて休暇果つ
 月光や羊は海の夢を見る
 相棒は糸通し器の夜なべかな
 長汀をただに歩けり秋の暮
 風入りに鏡の螺鈿彩放つ
 たひらかな湖の夜明けや雁渡る
 還暦を超えて楽しき熟柿かな

新涼の筆なめらかに奔りをり 近藤 久江

◆春野(8・21) きよ志報

あかときの色を宿して芋の露 秋山 昇

誰が置きし賽銭箱の蟬の殻 伊藤はる子

ひよつとして悪女なのかもダリア咲く 内田知江子

天の川ふと散骨のこと想ふ 尾崎 一夫

長居するこの世の果の花野かな 瀬戸 悠

八月や祈りは海へまた空へ 二見 和江

ふんはりとかき氷毒舌がぐざり 長谷川きよ志

◆みなみ(8・13) かほる報

赤とんぼずつと置きたい青い空 加藤 富江

コスモスや何時も気軽に寄れる家 加藤れい子

もういいか西瓜叩いて聞いてみる 加藤 健治

一言に返す二言秋暑し 市川めぐみ

「もつたないない」が母の口癖うちわ風 豊田 幸枝

秋天や生絹のごとき雲流れ 斎藤 静

鬼百合や何と明るく元気な子 小瀬村信子

もろこしの揺れる茶髪をもぎ取れり 加藤かほる

◆青梅(9・8) 幸子報

秋刀魚焼く話のはづむ夕餉かな 大塚 行人

岩をはい岩に同化す蜥蜴の子 湯本とし子

一筆箋 瀬戸りん

舌になぞる口内炎や原爆忌
 吹かれをる鸚哥の冠羽涼新た
 夢二忌や一筆箋の花模様
 手水舎に桔梗浸せる朝かな
 へうたんや風吹き抜くる無人駅
 猫の影集へる屋根や月今宵
 用筆に墨匂ひ立つ白露かな
 コスモスや石垣続く脇往還
 馬の目の映す連山秋高し
 焙じ茶濃く淹れてひとりや秋の宿

仏手柑 瀬戸正洋

歯を磨くをんな終戦記念の日
 仏手柑空が青いから歯痛
 水からくりイノベーションとモチベーション
 林檎剥く眼精疲労かも知れぬ
 ご丁重にお断りします天の川
 ひとつづつ剥がれるものに嘘としめぢ
 自転車の通勤二百十日かな
 背中から真つ逆さまに秋の暮
 秋の日や突然有線放送が流れる
 身に入むや珈琲依存症かも知れぬ

曾我山に登りて清し青蜜柑
 風鈴の次の音まつひとりの夜
 秋暑し気合を入れる萎えし脚
 きりぎりす昭和をさがし鳴く夜かな
 ◆沈丁(9・3)
 沈む気を立ち直れよと山法師
 沈む夕日今真つ直ぐに秋の海
 青虫や沈みし池の魚叩く
 日が沈みどこからともなく虫の声
 魍魅^{すだま}連れとんぼ渡るや沈下橋
 秋の海砂に字を書く遠くの日
 かまきりの鎌を収める眠りかな
 沈む足抜き出し一步稗を抜く
 白玉の浮くも沈むもひと色に
 鯛や音の重なり移る影
 逝く恩師沈む心や虫すだく
 秋風に犬とかたろう沈下橋
 三振にまたも沈めて猫じゃらし
 ◆鷹(9・2)
 街巡る水路の鯉や秋の昼
 秋立つや日暮の海の藍深む

加藤まり子
 久保寺トミ子
 田渕 令子
 田中 幸子
 寶子山報
 若村 京子
 柳澤ミサ子
 田中 恵一
 河本 純子
 瀧本 敦子
 勝木 澄子
 菅野 英余
 高井 幸子
 片野 節子
 峯尾ユキエ
 河本チヨ子
 清水美代子
 寶子山京子
 十五報
 青木 孝子
 池田 令子

撫子 中村昌男

和の国の各地甚振る秋出水
 秋灯下妻の遺影に声をかけ
 秋草に深く沈みて過疎部落
 撫子や言葉増やして一才児
 風となり光りとなりし花芒
 雨後の丘色鮮やかに女郎花
 虫集く後ろの闇を引き寄せて
 つぶやきは心の声と蚯蚓鳴く
 蓑虫や寂しき時は風を呼ぶ
 古里へ雲を押ししけ雁来る

一億年 畠 梅乃

黒葡萄ダミアに雨の音まじる
 かなかなの波が私を通りぬけ
 小鳥くる少女の文字は咲ふやう
 ここはもう夜の入口からすうり
 月光や臥房に展くピアズリー
 やさしさは曲線マルメロは記憶
 糸瓜揺れやはき光の保健室
 秋深し南蛮絵図の孔雀籠
 紅葉かつ散るちりちりと風乾く
 始祖鳥の冷ややかに反る一億年

手花火や一雨に闇のやはらかし
 長年のかかりつけ医のアロハシヤツ
 良夜なり飽かず回す万華鏡
 寝転んで星を観る会虫時雨
 五箇山の大きな豆腐水澄めり
 それぞれに想ふ人ある門火かな
 銀漢や国境の河渡る人
 秋旻や薬種問屋に深き軒
 炎吹く風に湿りや茄子の馬
 立秋や富士真向ひに橋渡る
 秋立ちにけり七色の釘穴
 阿波踊蹴出しの波の押し寄する
 海鳥の潮目に群るる晩夏かな
 飴色の母のものさし菊日和
 八朔や我を急かせる朝烏
 秋壽の空振きこゆ仕舞風呂呂
 灰青き丹沢山や遠花火
 梨食ふや旅に撮りたる写真手に
 肢持てば機織はた織りはたを織りにけり
 駅裏の一膳飯屋敗戦忌
 取り込みしシートに跳ぬる蝗かな

西賀 久實
 佐宗 欣二
 須田 晴美
 中田 笑子
 百川 秀子
 山崎美知子
 柏木 良花
 庄司 下載
 瀬戸 りん
 高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 大木 敬子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 加藤 幾代
 守屋 まち
 米山 翠
 來田 新子

板の間に四肢伸ばしたり秋の昼
聞き分けのできぬ虫の音皿洗ふ

大沢 年子

ちちろ鳴く酒場歳時記読み終えて

青木たけを

草原の馬の眼に秋夕焼

片野 秋子

二百十日地球にもある不整脈

伊藤 道郎

朝顔や机整理の終りたる

小林 環

青柿落ちた実りは何時と問うてみた

川合 昌子

物言ひて喉喜ばす花野かな

下平 美子

こおろぎや行き合いの空おだやかに

佐藤 正子

行く道は帰り道なり草の花

杉崎 せつ

星空に吸われるようにちちろ鳴く

中村 裕子

種採や山裾へ退く朝の靄

鳥海 壮六

グラタンほどのよき温みこおろぎ鳴く

野川木 一路

夕月夜日をまたがずの帰宅かな

古屋 徳男

父性とは十六夜の白き灯台

岡本 史郎

◆山北(8・25)

由里子報

◆草むら(9・19)

重満報

ガラス皿に浮かべて淡き夏椿

和田恵美子

曼珠沙華死は人生の途中下車

石井 秀稀

入道雲自在に廻るクレーン車

尾崎 幸子

秋澄むや犬に聞かせるむかし歌

井上 和子

起き抜けの水を一気に八月よ

中山 妙子

紋白蝶の未だ墓場を捜しおり

佃 悦夫

樹も石も神宿る国水澄めり

尾崎 竹詩

魂を呼ぶ月天心の恐山

秀泰報

太文字の「駐在便り」泡立草

石田加津子

◆おほる(9・14)

石井きよ子

飛ばし読む葉の処方鳳仙花

竹下由里子

夕さりの散歩の友や秋茜

高橋みどり

◆実のり(9・15)

たか志報

秋立つや風がくすぐる旅心

中津川晴江

梨なのに小粋な名前長十郎

岩本ひさみ

再来たい動けぬ夫が見た花野

二上 光子

挽ぎたての長十郎や片笑窪

杉本 久子

花野吹く風となりしや去りし君

小野 菊土

露けしや物の詰まりし丸ポスト

木村 幸枝

助けられ助けて歩む大花野

石井千代子

遠富士や光り揉み合ふ芒原

新井たか志

山かかえ蟬今生の大合唱

中村 昌男

◆零(9・15)

史郎報

秋草や群れて売り地の破れ旗

横塚 昌平

野仏のまなざしの先花野原
ほどほどの悔いと充足鱒雲
風にのる鉄路の響き大花野
幸せは自分で招く花野道
天の川一夜限りの天体シヨ一
何も彼も値上り模様秋の暮れ

◆たけのこ(9・14)

思い出の胡弓の調べ風の盆
刈田あと数多飛ぶもの遊ぶもの
鱒雲隣家の犬へ声をかけ
八十路なる雲に寄り添ふ夜々の月
大切な人は何処へ天の川

◆無所属

絨毯へ紛れちちろの居候
李太郎の庭の露草蝶去らず
スニーカーの女医の早足日雷
処暑の日の雨となりたる深眠り
ひと粒の次がなかなか早雨
兄の墓洗ふ戦地の泥もまた
マニユキアの指にはなれず敬老日
塩辛蜻蛉や麦藁帽子のお下げ髪

瀬戸とみ子

加藤 春江

中根登美子

廣田 悦子

香川 花子

風間 秀泰

悦女報

三木 泰子

小宮 早苗

徳田 公子

久津間百合子

宮崎 悦女

小林永以子

島 梅乃

一ノ瀬茂代

蓑宮 わか

出澤 洋子

木村美千代

岩楯惠津子

小島ノブヨシ

霧立ちぬ全身耳になり歩く

しあわせとひとり眩く栗ごはん

川上へ流れゆく雲秋の川

眠れずに押し殺したのは十三夜

朝冷えの血管針を逃けたがる

端とか隅とかが好きで九月かな

影に入り一息つきなと法師蟬

夜見世らは川のごとくに流れている

新涼や銀河鉄道栢山駅

新走り親子酒なる嘶聞き

たわいない話の行方蟬の穴

咲きそうで咲かぬ桔梗の意地つ張り

田畑ヒロ子

山田 照子

須田 聡子

穂坂志げる

小澤 園子

瀬戸 正洋

青木 勝子

大石 雄介

大石 和子

山本 すみ

杉山あけみ

大佐田うづき
(番号改名)

岡田 典代

山口 千代

北村 文江

木村予史重

理事会日程

10/13、11/10、12/8

いずれも木曜日けやき(開始は15時)
準備会は13時30分より

北村 文江

(令和4年6月号)

勾玉は胎児の形みどりの夜

尾崎 竹詩

勾玉は古代の装身具、翡翠、メノウなどが用いられた大きさは数センチ、廻ると弥生古墳時代に突き当たる。その神秘的な形を「胎児」ととらへ生命の起源をも想像させる。博物館でご覧になられた方も多いのでは。

作者の中七の発見が掲句を増々面白くしている。さらに「みどりの夜」が明るい未来を予言させてくれる。昨今世の中が騒がしい中、一服の清涼剤と受け止めたい。

田渕 令子

(令和4年7月号)

汽車走る町を眼下に実梅もぐ

高井 幸子

梅もぎは、夏本番を前に梅雨の晴れ間の一家総出の大仕事です。

「汽車走る」は梅どころ曾我野をぬって走る御殿場線の二車輦と拝察する。遠くの町や相模湾を望む丘陵で、太った青梅をもういでいる季節感たつぷりの健康な自然の景が見える。

下曾我に生まれ、郷土を愛する私の歳時記にびつたり。共感の一句です。

岩楯惠津子

(令和4年7月号)

空つぼだから何でも入る春の穴

大石 雄介

空つぼだから、春の穴つていわれてもどんな穴かしらと思いつつ、どんどん興味をそそられて、どんどんうれしくなって、私の大切なものも入れてくれるかしらと思っている自分。とつても奥深い意味のある句の様でもあり、そうでもない様な。失礼しました。とにかくその辺のこと作者に伺って、すつきりしたい句に、大いに興味津々の私でした。

高橋久美子

(令和4年7月号)

行けどもいけども頂きのなき登山 伊藤 道郎

破調、そしてリフレイン。一読、山頭火の「分け入っても分け入っても青い山」が浮かんだ。現実なのか夢なのか不思議な句だ。

来し方の人生を登山に喩えているのだろうか。人は常に目標に向かって努力をしてきた。その間には必ずしも高くななくても頂きはあつたはず。でも人はそれに満足せず、より高い頂きを目指すのだろうか。更に自分を高めたい景色を見るために。

香川 花子

夕風に急かされている秋桜
 金木犀夜明けの星となりにつけり
 若武者とまなざし交わす菊花展
 コロナ禍は残して去りぬ秋出水
 人去りて山は静かに初時雨

大島美恵子

夕星や青なく爆ぜてうめもどき
 こほろぎやメリケン針に糸通す
 立冬やスピンドル注す蝶番
 歳晩やバイトの巫女の綾櫛
 蒲団叩くこだま聞こゆる燕居かな

伊藤はる子

FAXの故障しきりに蟬の声
 みんなんに幽閉さるる一日かな
 枕辺に潮の香秋はすぐここに
 子の肩に止まりさうなる秋の蝶
 なきながらに添へる千代紙星月夜

石田加津子

天高し西新宿の大変貌
 秋の陽や引越しをする百貨店
 パーラーの順を待つ椅子秋日傘
 郊外へ二つの私鉄の雲
 それぞれの私鉄の空気を雁渡し

柳澤ミサ子

天地を茜に染める厄日かな
 秋惜しむ苦味かすかに湖の魚
 物置の昭和を捨つる残暑かな
 秋日和一句もなさず一日過ぐ
 野の風に彩づき初めし大公孫樹

廣田 悦子

断捨離に汗の結晶沁み込みて
 金色の月の道引く黒き海
 敬老日弱音吐かせぬ孫の文
 どんぐりと稚の寝返りコロコロン
 夫数ふ虫の音回旋曲虫五つ

須田 晴美

白桃や安否問ひ来し母の文
 門川の水豊かなりこぼれ萩
 天高し土手駆け抜くるバイク便
 路地裏の探偵事務所秋しぐれ
 珈琲にシナモン添へる白露かな

河本 純子

見上げれば罫雲なり猫御飯まんま
 秋草やノスタルジアの色七つ
 秋桜を「欲しいですか」と箱根路
 若くして逝きし兄なり赤とんぼ
 秋の雨短冊に筆走らせて

第59回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「梅」「日脚伸ぶ」（いずれも傍題可）各一句

一組 未発表作品に限る

締切 令和四年十二月八日（木）必着

整理費 一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）

投句先 〒258・0053 小田原市堀の内七九

須田聡子 ☎〇四六五―三六―〇〇九四

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和五年二月五日（日）

会場 小田原市民交流センター（UMECO）

受付 十一時 投句締切…十二時 開会…十二時半

整理費 五百円（呈飲料）

席題 春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで（結社賞含む）参加賞

（主催）小田原市観光協会 （主管）小田原俳句協会

（後援）各地俳句協会

*各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。

*会場は現在のとこ飲食可能ですがなるべく各自食

事を済ませてご参集ください。マスク着用など感染症

防止対策は継続します。

出澤 洋子

（令和4年7月号）

梅雨蝶の群れては沈む野菜畑

久保寺トミ子

雨の合間にほとほと低く飛ぶ梅雨蝶。あちこち群れている。よそ目にはただ美しい。作者の農に関連した句をよく拝見している。たぶん広い畑をお持ちなのだろう。

ふと気付くと蝶がいなくなっている。あれ雨が。

そしてその広い畑に沢山の蝶が雨をよけながら交尾したり卵を産んだりしている。やがて青虫となり野菜を食い荒されるかも。

梅雨蝶の逞しさ妖しさがよく描かれている。

二見 和江

（令和4年7月号）

しんがりは父の自転車若葉風

和田恵美子

他にもたくさん好きな句がある中で、わかりやすく気持ちがよく、幸せそうなこの句が素敵でした。

しんがりのお父さんは後ろから子供を見守りながら走っているのです。サイクリングのいで立ち、光る車輪、若葉の木立が見えてきます。そして、風に乗って子供たちの明るい声も聞こえてくるようです。勿論、よく晴れていて、空が大きく広がっているのでしょうか。

俳句おだわら鑑賞